

# 先週の回答



「日に当たらないからでしょう」  
 「それは関係ない」  
 「だって、顔が白いのは日陰にばかりいるからじゃないんですか？」  
 「顔が白いから白面じゃないんだ」  
 「だったらアフリカ系の人のような黒い顔も、インド系の褐色の顔も？」  
 「白面とゆう」  
 「理解不可能・・・」  
 「白面とは、顔の色ではない。いい意味では純粹で汚れていない。悪い意味では世間知らずの未熟者のことだ」  
 「すると白面とは」  
 「純粹な未熟者だ」  
 「つまり何の色にも染まっていないということなんですか？」

「そのとおり」  
 「それはいいことなんですか？」  
 「そのままではよくないな」  
 「といますと？」  
 「社会に出るまでは白面でもいいが、いつまでも白面では厄介だ」  
 「どうしてですか？」  
 「たとえば、入社してきた当時は酒も安和も知らないのは、みんな納得する。『まだんだんわかってくるよ、ははは』と先輩たちもほほ笑ましく思う」  
 「それが？」  
 「いつまでも、酒は飲めない女は知らない。ぼくはこのままでいいんですは困る」  
 「どうしてですか？」  
 「そーやって『どうしてですか』『何で

ですか』ぼくはこのままでいいんです』が困るんだよ」  
 「誰がですか？」  
 「周りの者がだよ。それなりに粹も甘いも噛み分けてくれるようにならないと」  
 「お父さんにもあったんですか？ 白面時代」  
 「社会に出るまでは白面書生の典型だったんだよ、父さんは。なあー、かーさん」  
 「ぼくの記憶では、お父さんは赤面書生でしたよ」  
 「恥ずかしがり屋だったからなあ・・・」  
 「じゃなくて、いつも酔っ払ってたからです」  
 「言えてる」とママ。



